

「顔文字」による日本語の円滑なコミュニケーション

——「配慮」と「ポライトネス」の表現機能——

原 田 登 美

目 次

0. はじめに
1. 「顔文字」はネットワーク時代の新しい記号——「顔文字」使用の年齢層と使用意識
2. 「顔文字」はどのように使われているか——「暗黙の了解」や「察し」が前提
3. なぜ「顔文字」が使われるのか——三つの理由について
4. リアルに生き生きと伝えるために——擬声語・擬態語の「顔文字」使用と会話的な通信文
5. 「パソコンメール」VS「携帯メール」——「顔文字」使用は簡便で日常会話的
6. 「顔文字」による「配慮」の表現——「敬意表現」の中での4つの配慮について
7. 「顔文字」の使用に見られるポライトネスストラテジー
8. 終わりに

0. はじめに

テレコミュニケーションの発達によって、日本語に新たな表記上の記号群が出現するようになった。パソコンメールやチャットや掲示板での会話、携帯メールなどの電子メールで用いられる「顔文字（フェイスマーク）」や「絵文字、記号」などの使用である。本稿では上記の記号群の中から特に「顔文字（フェイスマーク）」を取り上げて、日本語のコミュニケーション機能の観点、中でも「配慮」「察し」「暗黙の了解」「文化的背景の共有」などを前提とする日本型コミュニケーションの特徴や円滑な会話における「ポライトネス」との関連から考察を試みようとするものである。

「顔文字」を取り上げる理由は、第一に1980年代以降に登場した新しい記号であること^{注1)}、第二に文字と音声記号にはない特殊な機能を果たしていること、第三に外界の物音、人間や動物の声、物事の様子や心情を直接感覚的に表現しようとしている点で、擬音語・擬声語・擬態語に類似していること、第四に「顔文字」が送り手と受け手の相互の察しや共感を前提として機能している点で、高コンテクスト文化である日本語の特徴を具現していること、第五に、「顔文字」の使用がコミュニケーションを円滑にするためのポライトネスの役割を担っていること、第六に、現時点では20～30才代の若い世代に多く使用されて

いるが、今後、テレコミュニケーションによる情報化が加速すると、さらに使用の年齢層が広まって、今以上に重要な記号としての役割を果たす可能性があること、などである。

「顔文字」という名称については、「フェイスマーク」の呼称を用いている文献（高本：1993、三宅2000など）やインターネットの資料も多く散見されるが、本稿においては、世論調査報告書などの公的文書類やパソコンや携帯電話の入力一覧に「顔文字」の名称で使用されているところから、以後の文では「顔文字」の名称を用いることとする。ただし、引用文献に「フェイスマーク」とあるものはそのまま使用するので、特に断りがない場合には、「顔文字」と「フェイスマーク」を同様に扱っているものとする。

1. 「顔文字」はネットワーク時代の新しい記号——「顔文字」使用の年齢層と使用意識

文化庁文化部国語課（2001）は『平成12年度国語に関する世論調査』において、「現代の社会状況の変化に伴う、日本人の国語意識の現状について」の調査を行った。その中の「電子メール（Eメール）と言葉遣い」の項目に、「(^_^) や m(_ _)m などの顔文字」について次のような質問事項がある。「顔文字を見ると、発信者への親しみを感じる」かどうかについて尋ねたところ、「ある」と答えた人が56.9%、「ない」と答えた人が35.9%、「分からない」と答えた人が7.2%であり、半数以上の人々が「顔文字」が「発信者への親しみを感じさせる」と肯定的に捉えている。ただし、「(^_^) や m(_ _)m などの顔文字はふざけた感じがして失礼だ」という回答の人が11.3%おり、年齢的に見ると50歳以上の人々が「失礼だ」と感じる人が多く、50歳以上の年齢の中では、46.5%の人が「失礼だ」と感じている。性別では男性が14.6%、女性では6.9%の人が「失礼だ」と回答しているところから、「顔文字」が平成13年1月の調査段階では、まだ国民全体の市民権を得ているとは言い難く、特に50歳以上の人に「失礼だ」と感じる人が多いという結果となっている。

この結果は電子メールの年齢別使用の割合と相関関係にある。先の『世論調査』における「電子メールの年齢別の使用」比率を見ると、ふだん電子メールを使用する人の年齢層は50歳ぐらいまでであり、それ以上の年齢では電子メールの使用は少ないところから、電子メールを使用しない50歳以上の人々が「顔文字」の使用に対して何らかの抵抗感を持っていると言える。抵抗感があるというよりむしろ、「顔文字」の存在自体を知らないのかもしれない。

「顔文字」は1980年頃アメリカでエモティコン^{注2)}の名称で使われ始めたものが、日本では1986年以降にアメリカの表象とは異なる縦型の顔で描かれるようになって、使用が定着した。したがって、使用され始めてまだ20年ぐらいしか経っておらず現在も「顔文字」の種類が増えながら使用が広がっている段階である。そのため日本では既得権を得ていないところがある。しかし、20～30歳台では「顔文字」への親近性は高く、「顔文字」なしでは電子メールによるコミュニケーションはあり得ないと言われるまでに普及している。「顔

文字」は電子メールの使用がもたらした新しい世代のネットワーク時代を象徴する表現記号である。また、ネットワーク文化が産みだした新しい記号として今後注目されるべき存在であると言える。

2. 「顔文字」はどのように使われているか——「暗黙の了解」や「察し」が前提

電子メールでのやりとりは、送り手と受け手に「双方向性」はあるものの、直接の会話や電話などとは異なり双方がその場で同時に反応できるわけではなく、基本的には一方通行の文字言語使用によるコミュニケーション方法である。そのため、会話や電話などと比べると、顔の表情や体のしぐさ、イントネーションやストレスなどのプロソディー要素、またポーズ、ため息などのパラ言語的要素を伝えることはできない。電子メールにおいて、表現できないプロソディー要素やパラ言語的要素などの微妙な感情表現を補うために使用されるのが「顔文字」である。

例えば、

1) A: おかえりー、バイトおつかれ

B: 疲れたよお(×_×)、やっと終わった!

2) もう夕寝の時間やわ(T.T)~

のような1)の疲れや、2)の眠気は、直接会話であれば、表情やしぐさや身振りによって相手に伝わるし伝えられるが、電子メールでは文字化によって伝えるしか方法がない。そのため、それを「顔文字」によって図像化して描写して伝えるのである。また、次の3)では、

3) 旅行から帰ったら銀行すっからかん(!_+)

4) うちらホンマニよう働くワ(^◇^)

のように、「すっからかんになった」状態を想像してため息をつく顔つきやがっかりした表情が、「(!_+)」の「顔文字」によって、また4)では、自己称賛の発言への照れが、あっけらかんとした笑顔の表情の「(^◇^)」の「顔文字」によって、パラ言語的要素を補足して伝えているのである。

「顔文字」の伝達内容はプロソディーやパラ言語的要素だけに限らない。

5) ランニングしたら犬でもばてるわ、<(_)_>

6) A: そういや犬って飲み物は水だけ?

B: ペロペロ σ(^.^)、ミルク

のように、話題の内容について送り手が状況を想像して、5)では「犬がばてている姿」を図像化し、6)では「犬がミルクをペロペロなめている様子」を「顔文字」を用いて図像化しているのである。文字で表現したことをさらに視覚化し、文字以上のイメージを補足して表現しようとするところが、「顔文字」の表現機能となっている。

さらに、ある発言についての送り手の感情を、例えば以下の7)では、

7) サンフランシスコ～きゃ～憧れる～(∧○∧)

のように、憧れで気分が明るくなっているイメージを「(∧○∧)」の「顔文字」によって表現し、

次の8)では、

8) A: 関空で会うかもな☆

B: 何時の便?

A: えー, 11時くらい(∧◇∧)

B: 私は23時や(∧。∧)12時間違いやね \ (∧_∧)

A: 夜中かー(O_O)

じゃあ, 会わへんか(v_v)

一行目文末の「☆」は「顔文字」ではないが期待感で「きらきら輝いている心情」を記号で表現し、それに後続する発話の「A: えー, 11時くらい(∧◇∧)」で、「(∧◇∧)」は会えるという期待感を明るく持ち続けている気分を「顔文字」が表している。明るい気分だけではない。「A: 夜中かー(O_O)」では「(O_O)」が発話者の驚いた気持ちを表現し、「じゃあ, あわへんか(v_v)」では、「(v_v)」が残念だという気分を目を伏せて示しているわけである。また、相手に同意を得たいという気持ちの時は、「私は23時や(∧。∧)12時間違いやね \ (∧_∧)」と手を差しのべた「\ (∧_∧)」の「顔文字」によって、同意を求めている様子を示しているわけである。

この他, 次の9)のように、

9) ちょっと不吉…>_<…

のように、文末で顔をしかめた「顔文字」の「…>_<…」によって不安な表情を示したり、

10) の例のように、「こわ～」と怖さに思わず目を見開いた様子を「(◎-◎;)」で示し、

10) こわ～(◎-◎;)ほんま気づけてな

冷や汗を流しているような気持ちを示すなど、それぞれの発話の際に湧き起こった感情を、文字文の後に「顔文字」によって付け加え、多様に表すのが「顔文字」の使用方法なのである。

これまで、「絵手紙」のように、文章と共に好みの絵を書き添えて送ったり、「絵文字」のように、絵で語の意味を代替して文字と組み合わせて文章化する形式の手紙文は存在したが、文章の途中や一文の後に、パソコンのコンマ、コロン、()などの記号を用いて多様な顔の表情を工夫して創造し、イメージや感情を発話のように随意に付け加えるという「顔文字」のような記号は存在しなかった。「顔文字」のような記号や使用方法は、電子メールやインターネットの出現がもたらした新しい時代の記号と表現方法である。

いずれの言語の語彙においても、語彙によって意味されるものと、その意味とがそれぞれに対応関係を持っているのとは異なり、「顔文字」は一つ一つが明確な対応関係を持っているわけではない。どの意味の場合にどの「顔文字」を使用するかは、送り手の任意の選択で

あり、それを相手がどのように解釈するかは一定しているわけではなく曖昧なままである。送り手の意図どおりに受け手が理解するかどうかについては、厳密さが問われないのが「顔文字」使用の一つの特徴である。送り手が伝えたい「嬉しい感じ」や「困った感じ」などのそれぞれの感情は、文字文では通常、文章で表現するか、示された文章から含意として伝わるものである。しかし、「顔文字」では送り手がその時に抱き表現したいと思った感情を、「顔文字」一覧のリストから、表現の際に任意に選んで文章に付加して相手に送るのである。「顔文字」の使用は、いわば、送り手と受け手の「暗黙の了解」とお互いの「察し」の上に表現と理解が成立し、双方の共感の基にコミュニケーションが成立しているものである。「顔文字」の使用の背景には、曖昧な意味を甘受して曖昧な了解のままで良しとする、コミュニケーションのありかたが存在する。「顔文字」の用法には、その曖昧さを楽しもうとする要素が認められるのである。「暗黙の了解」や「察し」がコミュニケーションを支えているという点において、「顔文字」は、正に〈高コンテキスト文化〉の日本型コミュニケーションの特徴を示すものと言える。

例えば、「顔文字」の表す意味が受け手に不鮮明であるとしても、「察し」の及ぶ範囲で送り手の表現意図が伝わればそれで良しとするのが「顔文字」の機能と見做され得る。その意味において、「顔文字」の記号としての役割は、コンテキストに依存し、表現の理解は送り手と受け手がコンテキストを共有しコンテキストに共感することで成立っている。そこには、意味の厳密さを要求しようとする自己主張は存在しない。コンテキストを共有し、お互いの察しや配慮に委ねて、緩やかに互いが理解できればそれで良いとする日本型のコミュニケーションの特徴が見られるのである。

3. なぜ「顔文字」が使われるのか——三つの理由について

インターネットの「ネチケットご意見板」(2003.7)には、「顔文字」が使われる理由として以下の三つが挙げられている。

1. 使うと楽しいから
2. 簡単に感情表現ができるから
3. 文章のイメージを優しくしてくれるから

上記1の理由については、使う本人がたくさんの「顔文字」の中からどれを使おうかと選択する楽しみがある。自分の感情と気持ちに適った「顔文字」を一覧リストから選ぶのは簡易であり、選択の上であるが、表現は自在である。また、送った「顔文字」を見て、受け手がどう感じるだろうかとか、自分の表現を理解してくれるだろうかといった、コンテキストを共有する者同士に対する期待感がある。文章の中に「顔文字」があると、3の「文章のイメージを優しくしてくれるから」という理由にも通じるのだが、文字だけのメールより漫画やアニメに通じた視覚的要素が加わり、見た目にも柔らかい印象の感情表現になる。これ

らが、「『顔文字』を使うと楽しい」という理由となっている。

上記2の理由については、嬉しいときや喜びを表す時には、(^_^) (^_^) (^_^) (*^o^*) (^o^) (*^_^*) (^J^) (#^.^#) (^M^) (^.^) (^<^) § ^o^ § " ^_^ " (*^_^*) ^/^ <^!^> >^_^< (^o^)のような〈ニコニコ〉系の「顔文字」を用いて、

11) 思わぬお金が入ったよ (^◇^)

のように喜びを視覚化して伝えたり、悲しい時には、(´_´) (:_;) (;O;) (:_;) (:; (:; (:; (/_;) (T_T)のような〈シクシク〉系の「顔文字」によって、悲しみが表現できる。また、驚いた時には、(*_*) (*_*; (+_+) (@_@) (@_@.のような〈ビックリ〉系の「顔文字」を用いて感情を表わすなど、自分の感情や相手に対する感情を繊細にはないがおおまかに表現できることが2の理由の根底にある。感情表現を視覚化できることで、相手に具体的なイメージを与え、自己の感情を簡単に伝えることができるわけである。

「顔文字」が具体的に自己の感情を伝えることができると言っても、「顔文字」を使用する「電子メール」は直接会話とは異なり、むしろ相手との間に時間と距離を置くことを特徴とする伝達方法である。直接会話では相手の反応を見ながら、言葉を補ったり表現を修正したりして相互の感情に気遣いながらやりとりしなければならないが、電子メールでは相手の表情や顔色が見えないだけ、感情が直接的に即座に伝わるという不安からは逃れられる。電子メールではどのように感情を伝えるかに時間的な猶予が与えられ、表現を選択する自由と時間が与えられているのである。

その際に、「顔文字」による表現方法は、送り手のおおまかな感情を表して、表現する感情の幅や範囲が広く保たれており、一つ一つは繊細ではなく、一つの「顔文字」の意味する感情には繊細さや厳密さは求められていないのである。文字言語で感情を表す場合には、それを発した表現者には表現の責任が文章として明確になるが、「顔文字」であれば、一定の「顔文字」表現のリストの中から選択しているわけであり、おおまかにしか表現できないことで、相互の感情への刺激や気遣いが緩和される。リストの中から選んだ「顔文字」で表現するという了解が、相手にも合意されているわけであり、あくまでもリスト上の選択によって表された感情表現であるとの言い訳が立ち、「顔文字」の持つ選択性やおおまかさが感情表現を気軽に楽しませているのである。その気軽な表現方法が、直接会話でのやり取りによる感情の刺激を避け、直接会話で得られる人間関係の濃密さとは異なる楽しみを与えていると思われる。

「顔文字」が使われる三番目の理由については、「Web『ネチケットご意見板』2003.7.28」に、以下のような説明がある。

「インターネットの画面に表示される文章は、そのままだときつい感じになることがある。特に何かを非難するような文章や、誤りを指摘するような文章は、読んだ人にかなり『きつい口調』に見える。書いた人がたいして怒ってなくても、読んだ人には「これを書いた人はひどく怒っているな」と思われることが多い。また、冗談のつもりで言ったことが

「本気で言った」と誤解されることもある。なぜこんな誤解が起こるかという点、ほとんどの人は文を読む時に、自分の心の中で声に直して読んでいる。そのため、何かを非難するような文を見た時、読んだ人は「怒っている声」に直している。文の中にフェイスマークがあると、そっちに先に目がいく。文の内容が何かを非難するようなものであっても、『書いた人はそれほど怒っていない』とわかって読めるので、文のイメージが優しくなる。」

上に述べられた理由は、「顔文字」のもたらす表現効果に拠るものだと考えられる。例えば、

12) きのうち、3時に来なかったね、どうしたの？ (^_^)

と、文章だけでは非難するような文意のあとで、「(^_^)」や「(*^o^*)」のような「顔文字」を文末に付け加えることにより、送り手は怒っていないことを受け手に伝えることができる。また、催促する場合でも、

13) この前貸したCD、早く返してね (^o^)

のように「顔文字」を付加して催促すると、受け手は文末の「(^o^)」に先に目が行き、催促が威圧的なものには感じられなくなり、伝達内容が和やかな気分に包まれる。「顔文字」によって文全体の雰囲気や和らいで、文字のみによる通信よりは、送り手と受け手の間に和やかな雰囲気が醸し出されるのである。

「顔文字」は相手に対する明るい配慮だけではなく、例えば

14) 明日のことが不安 (⋯;)

のように冷や汗をかいた「顔文字」によって送り手の内心の不安を表したり、

15) あつかましいお願いだけどお願い申し上げます <m()m>

のように、依頼する時のためらいや恥じらいや遠慮を表現して、自己の体面の維持機能をはかるのである。

4. リアルに生き生きと伝えるために——擬声語・擬態語の「顔文字」使用と会話的な通信文

「顔文字」は、送り手が状況や心情をリアルに生き生きとそして自分なりの表現で伝えたいという意図を反映した記号である。例えば、「心が浮き立つ思いだ」とか「興奮してしまう」などと文字で表現しただけでは、自分の心情を叙述描写はしているが、その場の送り手自身の感情をできるだけ生のままでリアルに感覚的に表したいという欲求を十分に満たしてはくれない。例えば、そのような欲求を以下の16)～18)のように「σ(^ ^) ワクワク」「(°◇°) ガーン」「!(^ ^)! ぴんぽーん」のように、「顔文字」と擬態語の文字を添えて同時に表記すれば、心情と擬声・擬態が、視覚的に、より具体的に、わかりやすく受け手に伝えられる。

16) ちょっと冒険チックやろ？ σ(^ ^) ワクワク

17) それがさ、宿題 思い出してん(°◇°) ガーン

18) それって当たり!!!(^^)! ぴんぼーん

上記のように、叙述文の後に自分の心情を表現した「顔文字」と擬態語を付け足すことで、現在、発話中であるという臨場感が伝えられ、受け手の五感に反応して、場面の共有感が強く得られるのである。この共有感は心理学の「共感覚」と呼ばれる現象に基づくもので、人間の感性経験において、聴覚・視覚・触覚などの間に緊密な照応関係が働く作用である。視覚的・触覚的な領域を語音という聴覚的な形で捉えて表現した擬音・擬声・擬態語が送信者の感覚・感情を生のように受け手に伝えて臨場感を与えるのである。

電子メール文では、「〇〇。ごぼごぼ」や「(／＼) きゃあ」のように擬音語・擬声語が「顔文字」化されて、「水に沈む」様子や「叫び声」をそのままに描写して用いられることもあるが、通常では、このような擬音語・擬声語は「〇〇。ごぼごぼ」が「気持ちが激しく沈む」様子を示し、「(／＼)「きゃあ」」が激しく驚いたり困ったりした様子を表し、擬態語として機能する。擬音・擬声・擬態語の音と意味が「顔文字」の表情と視覚的に結びついて、送り手と受け手の感性が共鳴して感情を共有するのである。

電子メール文では擬音語も用いられるが、擬声語・擬態語の方が「顔文字」として多く用いられ、それらを文章に付け足すことで、感情が具体的かつ視覚的・感覚的に伝えられるという効果を発揮する。

したがって、「顔文字入力の一覧」にも、次のように、擬声語や擬態語別にリストがある。

〈えへん〉(^^) (┌^┐)

〈けけけ〉(^◇^)

〈わーい〉(^)o(^) (^ u ^) (^ v ^) \ (^O^)/ (**^^)v

〈にこ〉(^^) (^_^) (^o^) (^o^) σ(^^) >^_^< (∩.∩) (*^_^*)

〈キラキラ〉☆ミ

〈ぼりぼり〉(^^ゞ

擬声語や擬態語は修飾語であり、「修飾語の意味は、知的・客観的に記述することが可能な『意味の核』と、ニュアンス・心理など情緒的な色彩の濃い『意味の肉』の二層構造を成している。(略)『意味の核』の外層に『意味の肉』の部分がとりまいているが、ここには日本人がいただくイメージ、こめるニュアンス、暗示する心理など、きわめて情緒的な色彩の濃い、日本人共通の文化が内蔵されている」(飛田・浅田：2002, xii)。電子メール文において、「顔文字」化された擬声語や擬態語が多用されているが、その多用の背後には、擬声語や擬態語には日本人の考え方や共通の文化があり、それを送り手と受け手が共有して相互の理解が成立しているという事情がある。

また、擬声語や擬態語は書き言葉よりは会話の中でより多く用いられ、口語的要素が大きいものである。電子メール文において、擬声語や擬態語が「顔文字」として視覚化して用いられていることは、電子メール文が手紙文の要素を持ちながらも、会話的要素が大きいこと

を示している。

次のやり取りはパソコンによるチャットであり、双方が同時刻内に交互にパソコンに打ち込みながら交わした電子メール文である。

19) A: ねー、タイでその値段出せば、余裕で1ヶ月いれるかもー

B: ははは

A: ほんまや

B: 食料が無理

A: 病気とかなってそうよね (^_^)

B: からいねーん \(\odot\circ\odot)/

A: ほんま

やけるしね

B: 胃。あれまくり

すっかり現地人やわ

A: そういやカナダも暑そうから、日焼けとか注意よ

B: やねー

以上のやり取りはチャット（おしゃべり）ではあるが、文字によるものであり、電子メールによる手紙文と言えるものである。しかし、見てのとおり手紙文というよりは文字による会話のやり取りの一覧である。このやり取りの文字群の中には以下のような会話的特徴が観察される。

- ア. 漢字よりひらがな・カタカナが多い
- イ. 格助詞の省略が多い
- ウ. 「だ」や「かもしれない」などの述部を省略した箇所が多い
- エ. 「や」「よね」「ね」などの終助詞が多用されている
- オ. 「ほんま」「～ねん」などの方言、「そういや」などの俗語、「あれまくり」などの若者言葉の使用が見られる
- カ. 「ははは」「ー」などの音調的非言語要素がしばしば挿入されている
- キ. 「ほんまや」「ほんま」などのあいづちが挿入されている
- ク. 一文が短い

日本語の日常会話の一発話は一般に20音節ぐらいであり、発話が短いことに特徴がある（水谷：1988）。この特徴に示されるように、上記の例19)の電子メール文では、一発話は長くて25音節、短いものでは1音節であり、少数音節の発話から成っていることが観察される。また、全体の発話は相互のやり取りで協力して作り上げる「共話型」であり、発話の合間には「ははは」や「ほんまや」「ほんま」のように頻繁にあいづちが打たれて、相互の発話の積み重ねの上に全体の会話が形成されている。これは、日本型の会話のコミュニケーションの特徴を示すものである。

5. 「パソコンメール」VS「携帯メール」——「顔文字」使用は簡便で日常会話的

電子メールの楽しみとして、電子メールが音声ではなく文字による反応である点がまず挙げられよう。電子メールは、直接会話や電話などの音声による同時的な同一場所でのリアルタイムの反応ではなく、時間的にも空間的にも距離がある通信によるものだというのが電子メールの楽しさの背景となっている。

会話のように同時的ではなく、かといって手紙のように長い時間を隔てるのではなく、短時間の時間間隔を置いて、文字によってコミュニケーションをすることが電子メールの楽しみである。このような楽しみかたは、インターネットの普及によって新たに人々にもたらされたものだと言える。このような楽しみ方の背景には、音声言語では反応が直接過ぎて、相手の感情を即時に受け止めて反応しなければならないのが、時として直接的に過ぎて疲れや傷付け合う事態を招くことになり、それがわずらわしくなるということが認められる。けれども、その点電子メールでは、一定の時間間隔を置いて相互に反応すればよいのであり、感情反応も間接的となり強い刺激は緩和される。相互接触を婉曲的なやりとりや距離のある反応で留めおいてくれるのが心理的に楽であり、傷つかないで済むということが電子メールの楽しみの背景としてある。

一概に電子メールと言っても「パソコンメール」と「携帯メール」では使用のされかたに違いが見られ、田中（2001：39）の調査によれば、「携帯・パソコンいずれも『手紙・ハガキ』がもっとも『似ている』とされた点では同じだが、よりパソコンメールは『手紙・ハガキ』に似ており、携帯メールは『メモ』にも似ているという結果となった。」と報告されている。したがって、「パソコンメール」は「携帯メール」に比して、より書き言葉的であり、「携帯メール」には書き言葉の側面もあることはあるが、「より簡便な『メモ』的印象や『話し言葉』の『電話』に近いという印象が持たれている」（P.39）と述べて、携帯メールの「気楽・気軽」な要素を指摘している。

また、携帯メールは発信と受信が簡便であり、「パソコンEメールは、まだ手紙／文書という要素を残しており、書く際に暗黙裡に一定の構えをもってしまうという人もいる。その点、携帯メールはボソッとつぶやく独り言をそのまま文字にした感覚で利用できる。」（橋本：2001，24）という点においても、「携帯メール」は「パソコンメール」より会話的であり、伝達内容も「その場の出来事や気持ちの伝達」「とくに要件のないおしゃべり」「事務連絡」「質問」などの心情伝達や身近な情報伝達に利用されている。

2000年実施の橋本らの調査によれば、「携帯メール」と「パソコンメール」のやり取りの相手については、双方共に最も多いのが「ふだんよく会う友人」であるが、それを除けば、「『携帯メール』はふだんからよく対面する機会の多い人との連絡手段に頻繁に用いられている」のに対し、「パソコンメール」は「距離的に離れ、対面機会の少ない友人との交流や、仕事上の同僚との連絡にも多く用いられている」（橋本2001，28-29）ということから、「携

帯メール」は「パソコンメール」より、さらに日常的に密接な関係を持った人が対人面談に近い形でのコミュニケーションを行うのに用いられていることがわかる。

以上のような両者の相違は、視覚的なパラ言語的表記の上でも差異が現れ、記号・絵文字・顔文字の使用においては、「全体的に携帯メールの方においてこれらの記号が使われていることが分かる。」(田中：2001, 41)。「顔文字」については、「携帯メール」では「使う」が53.5%であり、「パソコンメール」では32.2%であることから、「顔文字」についても絵記号など同様に「携帯メール」の方が使用度が高いことがわかる。「顔文字」を含めた記号・絵文字が「携帯メール」でより多く使用されるのは、「携帯メール」の簡便性や即時性にあり、即時性が与える臨場感が会話コミュニケーションに近いものとなって、文字言語を補うためのイントネーション、ピッチ、ストレスなどのプロソディー要素やパラ言語的要素が必要となるからだと考えられる。

その際の「顔文字」はメール文に付け加えられた話し手の気持ちの表情を示すものであり、また発言の区切りを表すものでもある。その使用方法を見ても、「顔文字」は随意的な記号として用いられており、一つ一つの「顔文字」に定まった意味はないことが理解される。しかしながら「顔文字」を言語メッセージと比較すると、言語メッセージでは意味と記号が全くの恣意的であるのに比して、「顔文字」は図像的であり、意味するものを視覚化している点では「顔文字」と意味の間には類似性と相関性がある。「顔文字」の機能は一つ一つが送り手の感情を表わしており、受け手に送り手の感情をイメージ化させる役割を担っている。しかし、「顔文字」とそれが表す感情との間には記号体系としての意味と意味されるものの対応が決定されているわけではないので、送り手と受け手との間では、解釈に違いが生じたり、使用の意図が不鮮明となってしまうことが往々にしてある。曖昧なままに相互の理解を放置し、あえて完全な理解を求めないところに「顔文字」の機能が働いていると言える。具体的な意味対象をずばりと指示しえないところに、「顔文字」の婉曲的で間接的な表現効果が生まれるのであり、一つの意味を限定するという自己主張よりは、曖昧なままで摩擦を避け、相手との調和をはかる方を優先して、円滑なコミュニケーションのためには曖昧を許容し、人間関係の調和を重視している点で、「顔文字」は日本型の配慮、気配りのコミュニケーション方法として出現した記号群の一つであると言える。

6. 「顔文字」による「配慮」の表現——「敬意表現」の中での4つの配慮について

「顔文字」は文字だけの文章では相互の気持ちが伝わりにくくとして、文意を補足するために用いられる記号である。「顔文字」で文意を補足した結果、相互の気持ちのやりとりが和やかとなり、コミュニケーションは円滑に楽しくなるのである。「顔文字」に込めた気持ちや雰囲気、言語形式で表そうとしてもそれに相当するものはなく、「顔文字」を使用せずして同様な気持ちや雰囲気を言語形式で伝えることは困難である。

文字だけの文章と「顔文字」がある場合とを比べてみると、例えば友人に日曜日に映画に誘われたが都合が悪いとき、「ごめん、今度の日曜日は都合が悪いよ、今度またね」とだけ書いて送るより、「ごめん、今度の日曜日は都合が悪いよ、今度またね _(._.)_ 」と「顔文字」を入れることにより、申し訳ないと思いながら断っている送り手の気持ちが「顔文字」によって表現される。用件に話者の気持ちが付加されて相手の心情に配慮していることを「顔文字」によって示そうとするのである。さらに、上の文末に「今度またね _(._.)_ , (^。^)」と二つの「顔文字」を入れると、「断る」というマイナスのイメージを伴う感情が、「(^。^)」の明るい「顔文字」が加わったことで、受け手の気持ちを「今度」という将来に向けて、明るく引き立ててくれるのである。

別の面から言えば、「あの本、持って来てくれない？」と頼んだ時に、返事に「わかった」としか書いていなかったなら、相手は渋々「わかった」と言って来たものか、快く「わかった」と言って来たものかは文面だけでは判断しにくい。そのような時に、「わかった (^。^)」と〈ニコニコ〉系の「顔文字」が加わっていれば、快諾してくれていることが視覚的に理解できる。いわば、受け手である相手の顔が立つように配慮して、送り手が心配りする気持ちが「顔文字」に託されるわけである。「顔文字」が受け手の体面を調整する機能を果たしていると理解される。

「顔文字」のこのような機能は、「もっと早くいわなくてごめん m()m」と謝罪する時や詫げる時には、例えば「m()m」の「顔文字」によって、相手に詫げていることを文字に重ねて訴える。そのことにより、相手の体面を引き立てると同時に自己の体面をも維持して双方の体面維持と調整機能を行っている。また、「もっと早くいわなくてごめん (:;）」と〈シクシク〉系や〈冷や汗〉系の「顔文字」によって送り手の内面を表す時には、送り手の体面を維持して受け手と調和のとれた関係を維持しようとする機能を果たしている。

日本語のコミュニケーションにおける「配慮」を考える時、配慮表現の代表的なものには「敬語」が挙げられるが、第二十二期国語審議会答申（2000.12）は、「敬語に加え、敬語を使わずに配慮を表す表現もふくめて『敬意表現』」とする^{注3)}として、「円滑なコミュニケーションと敬意表現」について、「コミュニケーションとは我々が伝えたい情報や、自分自身の考え、気持ちをお互いに伝え合うことである。コミュニケーションを円滑に行うこと、すなわち話し手が伝えたいことを摩擦を起こさずに確実に相手に伝えることによって、社会の中で自分を生かし、安定した社会生活を送ることが可能となる」と述べている。次いで「敬意表現にかかわる配慮」の種類には、

- ① 人間関係に対する配慮
- ② 場面に対する配慮
- ③ 相手の気持ちに対する配慮
- ④ 自分らしさを表すための配慮

があり、これらの配慮が重なりながら互いに関連しつつ、コミュニケーションを円滑にする

ために種々の働きをしていることを述べている。

上記のような配慮を表すために、「顔文字」はどのような役割を果たし、どのような方法でそれらの役割を担っているのかを次に考えてみる。

①の「人間関係に対する配慮」については、「顔文字」は通常親しい間柄で用いられるある種くだけた表現方法であり、目上の人に対しては用いないか、ごく限られた数を使用することで親愛の情を示すものである。例えば、20)の例は学生から教師に宛てたEメールであるが、この例に見られるように、文頭や文末で、少数のものを使用することによって、送り手から受け手への親愛感を示す。

20) こんばんは。中華の食べ放題にいて、つつい食べ過ぎてしまいました。(^^;

(本文略)

では失礼しまーす \(\^^\)

「顔文字」は待遇関係においては、親しみや親愛の気持ちが下地となって使われているため、普通は友人関係や同じ立場の人、もしくは目下の人に対して親愛の物言いとして使用されるものである。目上の人には使用しないことによって丁寧さを示すか、もしくは適度に丁寧な文体とともに親愛の情を示すために付加されるものである。現状では、「顔文字」使用の可・不可自体が、使用が許されるような親しい関係かそうでないかを表す目安になっている。使用しないことで丁寧な気持ちを表す配慮として示され、使用するの親しみの感情を持つ対象に対してであり、それが「顔文字」の示す「人間関係に対する配慮」となっている。親しい者同士が親愛の気持ちを背景に、相互の関係をより円滑にするように配慮しながら、「顔文字」を用いているのが「顔文字」使用の現状だと見られるのである。

しかしながら、今後、電子メールがあらゆる世代に浸透し、「顔文字」の使用がさらに普及した段階では、「顔文字」使用の規範意識に変化が起り、「人間関係に対する配慮」の側面について、「顔文字」の機能が変化していく可能性は大きいと考えられる。

次に上記②の、「場面や伝達内容に対する配慮」については、以下の21)、22)の例が示すように、

21) お願い!~ 頼みごとがあるんだけど <m()m>

22) ごめん (m_m), また約束だめになって~

場面や伝える内容について相手に与える負担や申し訳なさを、「<m()m>、m()m」や「(m_m), ()/ハンセイ」などの「顔文字」によって視覚化し、「顔文字」を付け添えることで相手に対する配慮を示して使用されている。文字だけで謝罪やお詫びを伝えるだけではなく、その上に「顔文字」によって、送り手は受け手に「頭を下げている」こと、「手について詫びている」様子をイメージ化し、受け手への気持ちに対し配慮していることを付加してより丁寧に伝えようとしているのである。「顔文字」の使用により、送り手の配慮はより具体的に視覚的に相手の心理に訴えられるのである。

次に上記③の「相手の気持ちに対する配慮」については、次の23)の例が示すように、

23) A: 金曜プールいける??

B: いけるよー (*^^)v

相手の誘いに「喜んで行くよ」という同意や共感の気持ちを示すために「(*^^)v」を用いたり、また次の24)の例が示すように、

24) A: 日曜でもいいん?

B: いいよー (^_^)v

の顔文字「(^_^)v」により、Vサインの手を見せて「快諾」の意を表して、送り手の受け手に対する心遣いや配慮を示すのである。

また次の25)の例では送り手が受け手を明るく激励している様子を「(^o^)」によって表し、受け手が練習に励めるようにと、意気を盛り上げるための配慮を行っている。

25) じゃ、頑張って練習してな (^o^), またネ～

また、次の26)の例では「相手の肩を手で軽く叩いて」諫める感じで、「そうでしょ、気をつけなさい」と暗に示しながら、相手に注意を促すようなやさしい配慮を示している。

26) A: 夜の町は危険かな

B: 夜は出歩かんことやね \ (^_^)

「顔文字」は文字列に話し手の表情や身振りを添えて、あたかも話し手と聞き手がその場で会話を交わしているように文章をイメージ化する。そして、例えば上記26)では、「\ (^_^)」の「顔文字」によって、「夜は出歩かんことやね」の文字列だけでは表し切れない、話し手の気遣いや思いやりが視覚化されている。このようにして、送り手から受け手への配慮が示されるのである。

次に上記④の「自分らしさを表すための配慮」というのは、自分が相手にどのように見られたいかについてである。例えば敬語は、一面において「礼儀として」用いられる言語体系と考えられており、話し手の「品位」を表すための言葉であるとも捉えられる。品位は話し手の自分らしさを相手に伝える一要素となるものである。地域差を表す方言や世代差による言葉遣い、また年齢、階層、性差による言葉遣いは、話し手の社会におけるアイデンティティを示すための一つの手段である。「同じ命題内容を伝達するのに、さまざまなヴァリエーションの表現があり、その中の一つが選ばれて使用されると、まずその言語ヴァリエーションを使う人々の属性を指し示すことになる。」(井出: 1999, 65)と言われるが、それと同様に、インターネット社会においては、「顔文字」を使用するか否かがその人のインターネット社会の所属性を示し、誰にどのように使用するかによって、自分の置かれた立場やとるべき態度を選別して、多様な表現方法の中から自分にふさわしいものとして「顔文字」を選択する。それが「顔文字」についての「自分らしさを表すための配慮」となっている。

7. 「顔文字」の使用に見られるポライトネスストラテジー

高本(1993)は、主として語用論的な観点から、「顔文字(フェイスマーク)」^{注4)}に次の三つの機能が託されうることを述べている。すなわち、(1) 高次表意や推意を方向づけるコンテキスト化の機能 (2) 相手の体面について調整・維持を図る機能 (3) 自己の体面について調整・維持を図る機能、の三つである。

高本の言う(1)の「高次表意」とは、命題の表出態度に関わる表意であり、例えば、「あなたって相当しつこい性格ですね(^_^)→これは冗談です。」や「世の中いろいろありますね。(°°)→まったく驚かされました。」(高本1993: 69)などの、命題に対する話者の態度を表すものである。同様に(1)の「推意を方向づける」とは、例えば、「彼も別に悪気があったわけではないでしょう(^_^)→笑って許してあげましょう。」や「シスオペの奥さんは私の中学時代の同級生です(^_^)→これは、ここだけの話です。」(高本1993: 69)のように、表意以外の伝達内容を示すものである。「顔文字(フェイスマーク)」が担っている「高次表意や推意の想定を方向づける」機能を高本は《コンテキスト化の機能》と呼んでいる。次に、高本の(2)と(3)の「相手と自己の体面の調節・維持を図る機能」とは、ポライトネスに関わることである。

近年のポライトネス理論、とりわけリーチ(1980, 1983a)やブラウンとレヴィンソン(1987 [1978])は、語用論的現象としてのポライトネスに焦点を当てて、「ポライトネスは調和のとれた関係を作り出したり、維持したりするといった、さまざまな目的を達成するために話し手が用いる1つの(あるいは一連の)ストラテジー」(ジェニー・トマス: 1998, 172)であると述べている。とりわけブラウンとレヴィンソンはその後のポライトネス理論に大きい影響を与えているが、彼らはポライトネスについて「フェイス」^{注5)}の概念から次のように説明している。

「ポライトネスの学説においては、『フェイス』はすべての個人が持つ自分の値打とか像についての感じ方として理解されている。この像は、他者とのやり取りを通して、傷ついたり、保たれたり、高められたりする。フェイスは二つの面——「積極的」(positive)と「消極的」(negative)——を持っている。積極的フェイスとは、他の人に好かれたい、認められたい、尊敬されたい、評価されたいといった欲求に表れ、消極的フェイスとは、他の人から邪魔されたくない、抑えつけられたくない、行動を自由に選択したいといった欲求に表れている。」(ジェニー・トマス: 1998, 184-185)。この二つの「フェイス」を脅かさないように配慮することが、ポライトネスだと捉えるのである。

上記の二つの「フェイス」の観点から考えると、「顔文字」を使用することは、送り手と受け手が共通の記号を用いることから、相互に共通の基盤に立って「顔文字」の機能を駆使することにより、「積極的ポライトネス」のストラテジーとなり得るものである。すなわち、「顔文字」は仲間内のインターネット社会で用いられる記号であることや、「顔文字」が親し

い間柄で使用される親愛の記号だと了解し合うことで、「顔文字」の使用によって相手に好かれたいとか認められたいという欲求を持つ人間の「積極的フェイス」に働きかけ、「積極的ポライトネス」を示すことができるのである。

例えば、次の例の27)においては、相手の発言に対し明るく同意した様子を「(^ニ^)」によって表し、それに加えて「説明うまいね」と感心している気持ちを「顔文字」(^v^)によって強調することで、相手の「積極的フェイス」に働きかけ「積極的ポライトネス」を示している。

27) なるほど(^ニ^), よくわかった。説明, うまいね(^v^).

27) の例では、相手の「積極的フェイス」が脅かされないように配慮していることを、文字列だけに頼らずに「顔文字」によってさらに明瞭に伝えて、送り手のポライトネスを示そうとしているのである。

また、次の例の28)においては、

28) 荷物になるけど、日本食もっていきーや、体にいいで~(^◇^)

相手が海外旅行で外国食が体に合わないことを心配して、「旅行に外国食を持って行くように」とアドバイスをしているのであるが、このアドバイスは例え送り手の好意の上からであっても、相手が自分の意志のままに自由に行動したいという欲求を脅かすことになりかねない。したがって、このような相手の意を抑制するような「消極的フェイス」に配慮する必要が生じ、そのポライトネスストラテジーとして「体にいいで~」という付加発言がある。その上でさらに、相手の健康を心配していることを「顔文字」「(^◇^)」によって強調し、相手の「消極的フェイス」を脅かすことを避けて、配慮していることを示そうとしているのである。相手を思いやり、相手の体を心配している様子を「顔文字」で補強することにより、「消極的ポライトネス」の効果を高めて相手の消極的フェイスを満たそうとしているわけである。

日本人にとってアドバイスをすることは、アドバイスができる程度に親しみのある仲間とみなしているわけであるから、上記28)の例は、「消極的ポライトネス」と考えるより、むしろ「積極的フェイス」に働きかけた「積極的ポライトネス」と考える方が日本の文化に馴染んでいると考え得る。日本では、28)の例に見られるような、相手の状況を察して行うアドバイスは、思いやりや気遣いとして共同意識を育て、円滑な関係を築くために機能するのが一般的である。しかし、他の文化圏、例えばアメリカでは、相手が要求しないアドバイスをすることは、自由でいたいという「消極的フェイス」を脅かすことになり、日本のように思いやりや気遣いとして好意的に捉えられる要素とは異なった文化的様相を示す。その意味から28)の例では、相手の「積極的フェイス」に働きかける日本的ポライトネスストラテジーとして、〈ニコニコ〉系の「(^◇^)」の「顔文字」が用いられているのだと考えられる。

また、「消極的なフェイス」を脅かすことを避けて、それに配慮するポライトネスストラ

テジーを執った場合には、次の29)、30)の例のように〈シクシク〉系の「顔文字」を用いた例が多く見られる。

29) あんなお願いしちゃって～(v_v), ワルカッタね (;_;

30) 誘ってもらってうれしいけど、今、どこにも出かける気分になれないの～(-。-;)

上の29)では、「お願いすること」によって相手の自由でありたいという欲求の「消極的なフェイス」を奪ったことについて、「(v_v)」という俯いた目線や「ワルカッタね」のあとの「(;_;)」で涙を流している表情の「顔文字」を用いて、相手の気持ちの負担を気遣うというストラテジーによって相手への配慮を示しているのである。

また31)では、他者に邪魔されたくないという欲求への「消極的なフェイス」に対する脅かしに対して、冷や汗をかいた「(-。-;)」によって「消極的なポライトネス」に働きかけて自己体面の維持に努めているのである。

ここで、ポライトネスと電子メールの関連について言えば、そもそも、直接会話や電話によらずに電子メールという手段を選択すること自体が、「相手に邪魔されたくない、立ち入られたくない、自己の自由を守りたい」と言った「消極的ポライトネス」に関与することであると指摘され得る。相手との間に時間的空間的な距離を置いて、自分と相手の領域の中に音声による関与を認めない方法で通信を行うという手段には、相互の自由と領域に即座に立ち入らない方法で伝達を行うことで、消極的なフェイスを満たす電子メールの性質が存在する。その性質が、会話や電話が持つ音声による関与がもたらす利便性を欠く一方で、コミュニケーションの上で心理的な負担が軽減されるという利便性をもたらすのである。

なお、日本語の敬語は定まった言語形式の使用により、相手との一定の距離を保ち、相手の領域には立ち入らない、邪魔はしないという「消極的なフェイス」に働きかけて、配慮・気遣い・遠慮を示すことでポライトネスを表す言語体系だと言えるが、反面では敬語という定型どおりの言語形式の使用によって、話し手と聞き手が同じ集団に属する仲間であり敬語という言語形式を共有するという「積極的ポライトネス」に関わるという点から、敬語は「積極的・消極的ポライトネス」の両方を表す方法として機能しているものだと言えるのである。

「ポライトネス」に当たる日本語には「丁寧」という言葉があるが、Ide, Hill & その他(1992)によると、日本人にとっての「丁寧」が、「敬意」「感じがいい」「適切な」「思いやりのある」といった概念を表すのに対して、アメリカ人にとっての“Polite”とは、respectful, considerate, pleasant, friendlyなどの概念であると言う。両者の概念の中で大きく異なるのがfriendlyであり、その差異から他者への評価や店での客の応対などに両者の概念の違いが現われる。日本の敬語は目上・目下やウチ・ソトや仕事の役割関係の中で使用されて、基本的には人間関係の力による差が背景にあるのに対して、アメリカなどでは親しさが“Polite”の基本となっている。そのため、客と店員、教師と学生、上司と社員などの関係において、両国の対人行動には基本的な違いが見られることがあるのである。

8. 終わりに

電子メールは手軽にやり取りができることから利用が頻繁となり、用件をできるだけ手短かに直接的に相手に伝えてさらに便宜性を増そうとしていく傾向がある。そのため、省略も多く推敲も少なくなって、トラブルや誤解を生じたり相手への配慮が不十分だったりして、感情の行き違いが起こる危険性が増していく。そのような状況の中で、「顔文字」は文字だけによる表現の不足や感情表現の不十分さを補うために用いられ、その使用が「配慮」や「ポライトネス」を表現する機能をもたらしている。

また、インターネット社会で不特定多数の人と文字によるコミュニケーションを楽しもうとすると、従来の手紙の文体ではネットワーク・コミュニケーションのスピード感には追いつかず、必要性を満たさない面も多い。話しているように会話体で文字を綴ろうとしても、感情表現や身振りやしぐさなどを表す新しい記号が不足となり、必要となる。そこで登場したのが「顔文字」などの記号群であり、それらを取り入れた文字列や表現形式の方法である。

日本の「顔文字」は何よりも表情が豊かで数が多く、感情表現が豊かなことで知られている。「目は口ほどに物を言う」の喩えどおり、日本の「顔文字」は「目」の表情が豊かで変化に富み、多彩である。また「口」も様々な表情で描写され、正に直接会話での話者の顔の表情をリアルに表現しているのである。

このような日本の顔文字に比べると、例えばアメリカの「顔文字」である「エモティコン」は「ウオークマンを聞いている様子, [:—]」や「サングラスをかけている様子, [B:—]」などのように、物理的な状況を伝えることが多い。

「顔文字」にはそれぞれの文字に対応する意味が定まっておらず、日本の「顔文字」は数が多く多様なだけに、その理解は送り手と受け手の「暗黙の了解」や「察し」に依存しているのが状況である。送り手と受け手がコンテキストを共有し相互にコンテキストに共感することで、「顔文字」の表現と理解は成り立っているのである。「顔文字」のネットワーク・コミュニケーションへの取り入れかたそれ自身が既に日本型コミュニケーションの枠組みの中での起動であり、その中での活動であると指摘できる。そして「顔文字」の起動と活動が目指す方向こそが、「日本語の円滑なコミュニケーション」であると言えるのである。

ネットワーク記号群の中でも、「顔文字」は次々と新しい文字を増やし、若者の間で楽しまれている。もはや現代の日本人の若者にとっては、「顔文字」なしではメールによるコミュニケーションが不可能な域にまで達しているとも言える。「顔文字」はコミュニケーションの不得手な若者がインターネット社会で自己表現の方法として産み出した新しい記号であり、「顔文字」使用に見られる「配慮」や「ポライトネスストラテジー」は若者の思いやりと、自己主張を好まない日本人の自己表現の新しい方法と見られるのである。

今後、テレコミュニケーションがさらに普及し、電子メール使用の年齢層が拡大していく

と共に、「顔文字」の使用もさらに広まり、ネットワーク・コミュニケーションに占める「顔文字」の使命がさらに大きくなると予想される。

注

- 注1) 日本で「顔文字」が使用されるようになったのは1986年以降といわれる。当時まだ実験段階だったパソコン通信のアスキーネットでその使用が確認されている。(金川欣二：マック de 記号論「言語学のお散歩」)
- 注2) アメリカのエモティコンは、「:—)」や「:—D)」のように顔が横になって表され、日本の「顔文字」が顔を縦に描くのと異なっている。
- 注3) 答申では、「本試案では相手や場面に配慮した言葉遣いは敬語以外でも行われていることに注目し、敬語に加え、敬語を使わずに配慮を表す表現も含め、『敬意表現』として扱うものである。」と述べられている。(「現代社会における敬意表現(案)」P.6参照)
- 注4) 高本(1993)は、「顔文字」という名称を用いずに「フェイスマーク」と呼称しているが、文脈の整合上、ここでは「顔文字(フェイスマーク)」の用語によって記述した。
- 注5) 「評判」とか「名誉」といった意味で、日本語の「面子」に通じる概念である。しかし完全に同じではないので、「フェイス」とカタカナで記す。

参考文献

- 東 照二(1997)『社会言語学入門——生きた言葉のおもしろさにせまる』研究社
 (2001)「ポライトネス・ストラテジーの日米比較——上司と部下の間での不満表明とその解決交渉——」(『談話のポライトネス—— Discourse Politeness』国立国語研究所)
- 井出 祥子(1999)「敬語は何をするものか——敬語のダイナミックな働き——」(『日本語学』vol. 18, 8月号, 明治書院)
 (2001)「国際化社会の中の敬意表現——その国際性と文化独自性——」(『日本語学』vol. 20, 4月号, 明治書院)
- 宇佐美まゆみ(1997)「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」(『女性のことば・職場編』現代日本語研究会編)
 (2001)「談話のポライトネス——ポライトネスの談話理論構想——」(『談話のポライトネス—— Discourse Politeness』国立国語研究所)
- 太田 一郎(2001)「パソコン・メールとケータイ・メール——『メールの型』からの分析——」(『日本語学』vol. 20, 9月号, 明治書院)
- 沖 裕子(2001)「地域社会に生きる敬意表現」(『日本語学』vol. 20, 4月号, 明治書院)
- 坂本 恵(2001)「『敬語』と『敬意表現』」(『日本語学』vol. 20, 明治書院)
- ジェニー・トマス著, 浅羽亮一監修(1998)『語用論入門』(研究社出版)
- 杉戸 清樹(2001)「敬意表現の広がり——「悪いけど」と「言っていないかなあ」を手がかりに——」(『日本語学』vol. 20, 4月号, 明治書院)
- 第22期国語審議会・第1委員会答申(2000)「現代社会における敬意表現」
- 高本 條治(1993)「パソコン通信におけるフェイスマークの機能」(『日本語学』vol. 20, 4月号, 明治書院)
- 田中ゆかり(2001)「大学生の携帯メール・コミュニケーション」(『日本語学』vol. 12, 12月号, 明治書院)

- 橋元 良明 (2001) 「携帯メールの利用実態と使われ方——インターネットによるEメール利用との比較を中心に——」(『日本語学』 vol. 20, 9月号, 明治書院)
- 飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 文化庁文化部国語課 (2001) 『平成12年度 国語に関する世論調査〔平成13年1月調査〕——家庭や職場での言葉遣い——』(文化庁)
- 三宅 和子 (2000) 「ケータイと言語行動・非言語行動」(『日本語学』 vol. 19, 10月号, 明治書院)
- (2001) 「ポケベルからケータイ・メールへ——歴史的変遷とその必然性——」(『日本語学』 vol. 20, 9月号, 明治書院)
- リーチ, G. N. (1983) *Principles of pragmatics*. Longman, London [池上嘉彦・河上誓作訳『語用論』紀伊国屋書店, 1987]
- Brown, P., Levinson, S. C. (1987 [1978]) *Politeness. Some universals in language usage*. Cambridge University Press, Cambridge
- Ide, S., Hill, B., Carnes, Y. M., Ogino, T., and Kawasaki, A. (1992) The concept of politeness: an empirical study of American English and Japanese. In Watts, R. J. et al. (eds.) *Politeness in language: studies in its history, theory and practice*. Berlin: Mouton de Gruyter
- Leech, G. N. (1980) *Explorations in semantics and pragmatics*. John Benjamins, Amsterdam
- Web 「ネチケットご意見板」(2003. 7. 28) 「フェイスマーク」

本稿の執筆にあたり、渡辺奈緒子さんからたくさんの電子メール通信(私信)の資料を提供していただきました。ここに感謝の意を記します。